

調査報告

一八九〇～一九三〇年代の北海道におけるツルと人

山田伸一

キーワード

ツル (Crane)、新聞 (Newspapers)、短歌 (Tanka)、環境史 (Environmental history)

はじめに

北海道を中心としてツルと人間の関係史について研究してきた久井貴世氏の参加を得て、二〇一四年に開催した北海道博物館第二回企画テーマ展「鶴」ではⅠ、「IV タンチョウのいま」のなかに「北海道・道東のシンボルとして」のコーナーを設けた。

タンチョウは現在、道東や釧路を象徴する存在となっており、街灯やマンホールの蓋、バスの車体、菓子など様々な商品、札幌と釧路を結ぶ特急列車のヘッドマーク等々にその姿がある。そして、釧路を本拠にアジアリーグを戦うアイスホッケーチームもクレインズを名乗っている。

北海道の象徴という面を端的に示すのは、一九六四年にタンチョウが北海道の鳥に選ばれたことだろう。「北海道百年」の記念施設としてその頃から計画が進み、一九七一年に開館した北海道開拓記念館、今の北海道博物館の建物の中にも、ツルの姿を見ることができ^①。建物の正面に立つ銅像「羽ばたき」(山内壮夫作)はツルをかたどったものだ。また、記念ホールの正面に掲げられたタペストリーの絵柄に北海道を代表する動物六種と植物四種が織り込まれた中に、鳥類で唯一タンチョウの飛ぶ姿がある。

ところで、近世蝦夷地でもツルが重要な産物とされていたとはいえ、そこから一貫してタンチョウが道東や釧路、北海道の象徴と位置づけられてきたわけではあるまい。人びとのツル観には、歴史的な変化があったと思われる。特に明治期から一九二〇年代頃は、北海道内でツルはほぼ見られなくなっていた時期として知られている。ここではこの時期を意識しつつ、断片的ながら多少の史料を得ることができた一八九〇年代から一九三〇年代を中心に、ツルと人の関係を垣間見てみたい。

一 道内刊行の新聞から

この時期の北海道のツルの状況を見ておく^②。

一八八七年頃から道内ではタンチョウの絶滅が憂えられるようになり、北海道庁は一八八九年五月、道内における「鶴」の猟獲を当分禁止する庁令を発した。翌年一月、道庁は千歳郡馬追山麓より千歳川に至る各沼地ほかを「鶴蕃殖地」として鳥類に対する狩猟活動を禁じるなどの措置をとったが、タンチョウの姿を見ることがなかった。その後、一九二四年に釧路湿原で野生のタンチョウが「再発見」され、一九三五年八月に文部大臣が「釧路丹頂鶴蕃殖地」二七四八町歩を天然記念物に指定。たまたま同年の歌会始の勅題が「池辺鶴」で、『朝日新聞』がこれにちなんでタンチョウの写真を発表し、釧路のタンチョウが全国的な関心を集めるようになった。

一九三六年に陸軍特別大演習のため昭和天皇が来道した際、道庁の依頼で吉田初三郎が描いた「北海道鳥瞰図」(北海道博物館所蔵)にも、多くの名勝を書き込むなかに「丹頂鶴蕃殖地」の文字を見ることができ^③。

さて、この数年の間に、一八九〇年代から一九三〇年代にかけて札幌・小樽・函館で刊行された新聞を網羅的ではないがめぐる機会があった(釧路で発

行の新聞は未調査)。発行地がツルの生息地から離れているせいもあるのか、道内に生息するツルについて記した記事は少ない。そのなかには例えば、次のようなものがある。

札幌で刊行の『北海道毎日新聞』一八九一年十二月五日付は、道内に生息するツルの「絶種」を言う者もいるなか、冬季の千歳地方に雌雄一羽ずつのマンザルが、根室地方の風蓮湖にタンチョウ二羽が飛来するとの伝聞を紹介する。同紙を引き継いだ『北海タイムス』一九一四年十月二十五日付は、根室管内目梨郡飛仁白の長川漁場に「大鶴」一羽が舞い下りたのを人夫たちが生け捕りし、飼育していることを報じる。釧路湿原でのタンチョウ「再発見」の後、『小樽新聞』一九二六年四月十二日付は、雪裡原野から来たタンチョウの群が釧路の上空をツルが飛翔する姿が見られたことを「目出度いことの前兆か」と報じる。一九三〇年代半ばになると、道東のタンチョウの保護についての記事も見える。『函館毎日新聞』一九三五年二月四日付は阿寒国立公園附近にタンチョウの禁猟域設定の議論があること、八月二十八日付は「釧路丹頂の鶴蕃殖地」の天然記念物指定を報じる。

生きているツルについての記事がほとんど載らない時期にも、新聞紙上にツ



図1 『函館毎日新聞』掲載の商品広告より

* 1929年4月25日付、1930年10月21日付、1931年8月20日付

ルの姿を見ることは少なくない。企画テーマ展「鶴」の「Ⅲ ぐらしのなかの鶴」では、当館収蔵庫で探索した成果をもとに、食器・衣類・家具や建物の意匠・酒のラベル・商品の印などに、実に多くのツルがいることを紹介した。ツルは古くから中国・朝鮮や日本で幸福や長寿を象徴するものとされてきた。そうしたツル観から生活のなかに図柄としてのツルが浸透していたのだ。

新聞紙上のツルの多くも、これと通い合う性格のものだと言える。正月の紙面には、見出しの飾りや広告に、しばしば亀や松と取り合わされて多くのツルがいる。広告欄には商品の印のツルがいる（一部を図1に紹介する）。

一つ注意しておきたいのは、これらの商品を製造しているのは、いずれも北海道外の企業だということだ。この時期について北海道にツルが生息していることに由来した商品の広告は、今のところ見つけることができていない。

二 函館毎日新聞掲載「晴天鶴」

新聞紙上には文字の「鶴」も見られる。その一つ、短歌に注目してみた。

一九一六年十一月三日の『函館毎日新聞』朝刊は、「奉祝文芸和歌」として「晴天鶴」の題で読者から募った短歌を掲載した。選者は文学博士佐佐木信綱。優れた作品を天・地・人の一首ずつ選び、それに次ぐものを「秀逸」として二一〇首余を載せる。この企画は、この日に裕仁親王（後の昭和天皇）の立太子式が挙行されるのに合せたものだった。これより前から同紙は、毎年の元旦のほか、皇室関係などの慶事がある際に、このように題を設定して和歌や俳句の募集をしていた。

この時に限らず、同紙の企画で佐佐木信綱が選者をした作品は、作者が直接に見聞した情景を詠もうとするのではなく、非常に観念的なものが多い。「晴天鶴」の場合も、その傾向は強い。天・地・人の三首を引いてみよう。

くもりなき瑞穂の国の大空に満ちあふれたるあし鶴の声

(谷地頭町 八木霊寿)

みたれたる雲を千里のほかにして瑞穂の空に謳ふ友鶴

(東雲町 坂本さかゑ)

くれないの朝日をあひて鶴を舞ふ真青にはれし久方の空

(蓬萊町 松崎映太郎)

情景を描写してはいるが、実際に生きているツルを見ての作のように思えない。「晴天鶴」という題と、「奉祝」という趣旨に沿う情景を想像し、決まり切った表現を組み合わせて、巧みに歌に仕立て上げているという印象をもつ。

「秀逸」の作の多くも、姿態について「光を浴び」「立ち舞ひ」「舞ひ渡り」、声について「千代を告げ」「御代を祝ひ」などと表現する。実景ではなく想像による、観念的という傾向は、生物としてのツルには縁がない松とともに詠み込んだものが非常に多いことにも見て取れる^④。その一部を引く。

松ヶ枝を遠くはなれて青雲のたなびく空に舞へる鶴はも (武富安雄)

君が代の千年の松に舞鶴のよはひをいはふ今朝の長閑さ (高島房子)

禁苑の松にぞ鶴の巣ごもりて君のなさけにはぐまれに覺 (塚田霞葦)

はれて尚ほ天飛ふ鳥も羽をのさん苔むす松につるのすこもり (森川フキ)

青そらに千代よ鶴のいくたひか東宮御所の松に下り来ぬ (小西武雄)

北海道とツルの関わりを詠み込んだ歌は「秀逸」中に次の三首がある。

蝦夷富士も遙に見えて舞ふ田鶴は曇りぬ御代を空に知るらむ (赤塚南花)

蝦夷が島高砂かけてはれ渡る天つみそらにあし田鶴の声 (渡辺貞三郎)

長へにはれる御代こそ畏けれ蝦夷が島根に田鶴を舞ひつる (水野信一)

これらは実際に生きたツルを見て詠んだ作だろうか。私にはそうは思えない。また、北海道とツルは特に関わりが深いということを意識しての作だろうかという点についても、疑問に思う。一首目の「蝦夷富士」は具体的な地名だが、富士とツルの取り合わせはお決まりのもので、そこに少し地域色を加えただけのものだろう。同じ「秀逸」には次のような作品がある。

はれわたる富士が高嶺のそらかけて千代万代と祝ふ田鶴哉 (前田常四郎)

仰き見る不二の高嶺も明かに田鶴むれ遊ぶ駿河路のそら (藤野竹亭)

舞ひあそぶ田子の浦和のともたつの羽風に匂ふ富士の神山 (荻家穂丸)

全体として言えば、これらの歌の傾向は、生きたツルの存在感が乏しくなっている北海道の状況と呼応し合っているように見える。もともと、先に断ったように、この時に限らず同紙掲載の佐佐木信綱選の和歌は観念的な傾向が強いから、この時の紙面だけで、突っ込んだ議論はすべきではないだろう。

そこで、直接見聞きしたものを詠むべきだとする立場、言い換えれば写生を主義とする立場に立つアララギ派の歌人たちの作品を見てみたい。

三 アララギ派の歌人たちの作品から

① 斎藤茂吉 (一八八二―一九五三年)

写生を重視する歌人たちの代表格として、まず斎藤茂吉に注目し、その歌集十七冊から鳥を読み込んだものを拾って、表1を作成した^⑤。作品中では鳥の名を漢字で表記するものがほとんどだが、表では原則的に片仮名表記にして五十音順に整理した。

最も多く詠まれているのはカラスだった。居住地が移り変わり、海外に滞在していた時期もあるのだが、カラスはほぼ満遍なく詠まれている。ウグイスやホトトギス、ガン・カモ類など、古くから和歌に詠まれてきた鳥も多い。七面

表1 斎藤茂吉の歌集のなかに詠み込まれた鳥

歌集名 収録歌の 作成時期	赤光 1905 ～13	あらたま 1913 ～17	つゆじも 1918 ～21	遠遊 1922 ～23	遍歴 1923 ～25	ともしび 1925 ～28	たかはら 1929 ～30	連山 1930	石泉 1931 ～32	白桃 1933 ～34	暁紅 1935 ～36	寒雲 1937 ～39	のぼり路 1939 ～40	霜 1941 ～42	小園 1943 ～46	白き山 1946 ～47	つきかげ 1948 ～	計
アヒル	1	1																2
イソヒヨドリ			1															1
ウ						1			6	5	2				1	1		16
ウグイス			1			1	2		1	1	1		1	5	1	2	5	21
ウズラ								2										2
ウソ																1		1
ウミスズメ		1																1
オナガドリ							1									1		2
カササギ	1							11										12
カシドリ									1	1								2
カッコウ				1			1					1			1	2		6
カナリヤ					1							1						2
カモ								3					1			3	1	8
カモメ			1						2		5	5			1		1	15
カラス	1	11	5	2	3	5		3	2	2	1	3	2	1	5	5	10	61
カワセミ																1		1
ガン（雁）						8	5	13	2	4	1	1		2	3	4	1	44
キジ	1	4		1		2		2	1	1	1	2	1	1	1		2	20
キツツキ								1	1									2
クロツグミ																1	2	3
コウ（鶺鴒）	1															2		2
コガラ										2			1	3	3	2		11
サギ			1				7	1		4						1		14
シジュウカラ										2								2
七面鳥	2	16																18
シャモ		4															1	5
白鳥（しらとり）	1			1														2
スズメ										2	1	1			3	1		8
セキレイ						1												1
タカ									3									3
チドリ									1		1		1				1	4
ツグミ							1			1						1		3
ツツドリ														1	1			2
ツバメ	1			1	1										2	2		7
ツル	3		1								10	6	1			1	3	25
トビ									1	3		1				2		7
トラツグミ																	2	2
鳩鳥																1		1
鶏	7	4	1		1	6						1		1	3	1	7	32
ハヤブサ							1											1
ヒバリ	1							1	1	1		1		2	1	3	1	12
ヒヨドリ												2	2		1		2	7
ヒワ															1			1
フクロウ									1						1	4		6
ブッポウソウ						15					5							20
ペリカン	1																	1
ホオジロ									2						1			3
ホトトギス						2	4			7	2	1		4	3	8		31
ミソサザイ																3		3
ミミズク						2	1											3
ムクドリ											1				2	1	3	7
メジロ										1								1
モズ									1									1
ヤマドリ										5	2	4						11
ヤマハト	3								3					10	12	1	2	31
ヨシキリ	1														1	4		6
ライチョウ																	1	1
ワシ												2	2					4
種不明	8	3	5	6	5	18	12	9	6	17	12	13	11	15	7	7	6	160
合計	32	44	16	12	11	61	35	46	35	59	45	45	23	45	55	66	51	681
備考		「七面鳥」 連作	長崎滞 在、洋 行往路	ウィー ン、滞 在、独 ・ハ ンガ リー 旅行	ミュン ヘン、 パリ、 マル セイ ユ、 帰国			満州、 北平 (北京)、 朝鮮	北海道 行きを 含む						山形県 疎開後 を含む	山形県 大石田 に住居		

* 『斎藤茂吉選集』による

鳥や仏法僧はそれを主題とした連作があることで全体の数が多くなっている。ツルを詠んだものは二十五首で、六番目に多い。北海道のツルを詠んだものは見当らない。

茂吉が北海道を訪れたのは、一九三一年の一度だけだったようだ。天塩国志文内（現中川町）で医者をしていた次兄を訪ねるのを主目的に来道し、道内各地と樺太を訪れたものだ。そのときの作品を収めた『石泉』から道内での作歌の地を拾うと、志文内・稚内・旭川・層雲峡・深川・狩勝峠・釧路・阿寒・根室・札幌・石狩川・支笏湖・苫小牧・白老・登別・大沼公園・湯の川温泉となる。タンチョウと縁が深い地も含まれるが、作歌に結びつく見聞はなかったのか。

表1を参考にツルの歌をたどってみる。

『赤光』の三首のうち二首は動物園で飼育していたものを詠む。もう一首は、一九〇七年の作で、飛ぶツルを詠んだものだが、どこの情景かは不明。

『つゆじも』の一首は岡山の後樂園で飼育されているもの。

『暁紅』のうち八首は、一九三五年の歌会始の題、「池辺鶴」によるもの。もう一首も「春光」の表題でこの近くに収めてあり、同じような性格の作か。残る一首は「三宅家新婚賀二首」中のもの。

『寒雲』のうち一首は、小石川後樂園で飼育のものを詠む。五首は「鶴」の連作で、鹿児島阿久根のツルを詠む。

『のぼり路』の一首は、「三月芝松太郎翁喜寿賀」という詞書がある。

『白き山』の一首には「御題あけぼの」と添えてあり、出席しなかった歌会始の題に寄せて詠んだものか。

『つきかげ』のうち一首は、「水のなぎさに鶴卵をあたたむ」とあり、飼育されているものを詠んだか。一首は、新年に床の間にかけた絵を詠む。最後の一首は「白き鶴空に群れたるおもかげをまさやかにしてひとり臥したり」という病床での作。

明らかに自然界のツルを詠んだものは『寒雲』中の五首だけで、それ以外は

飼育されているものを詠むか、『暁紅』以降は、結婚や喜寿の祝いに寄せて縁起物として、さらには歌会始などの題に依じてツルを詠んでいる。若き日には漢詩の題のように限定した題詠のために歌が単調になる弊を指摘した茂吉だったが、歌壇内や社会内での地位の上昇につれて態度を変化させていったものか^⑥。なお、実見していなくても、写真などをもとに詠んだものを含む可能性もあるだろう。

②平福百穂（一八七七一—一九三三年）

一九〇七年、斎藤茂吉らと親交があり短歌もたしなんだ画人の平福百穂は、絵画制作のために釧路・阿寒・塘路を訪れた^⑦。その際の短歌作品二十七首の連作「釧路行」では、「塘路沼」中にカモを詠んだ三首があるが、ツルを詠んだものはない。

③土屋文明（一八九〇—一九九〇年）

土屋文明には、二度の北海道訪問がある^⑧。一九三〇年四月五日から十六日の旅の作を収めた『山谷集』には、「北海道雑詠 空知川上流」四首、「弟子屈」七首、「移民村」六首、「屈斜路湖」四首、「網走線」六首、「阿寒湖」十首、「根室港」十四首、「支笏湖畔アララギ歌会」五首、「稚内往復」十四首、「福山に至る」八首の計七十八首があるが、ツルを詠んだものはない。

一九四七年八月下旬から九月三日の北海道行きの作は、歌集『自流泉』に「北に行かむとして」六首、「網走にて」十五首、「洞爺湖昭和新山」二十一首、「北国の花」十首、「層雲峡」六首、「硫黄山」九首、「弟子屈摩周湖」十一首の計七十八首を収める。このうち「北国の花」の五首目に「鶴の来ると伝ふる海沿の牧広く雨ふりすぎてギボウシの花」とある。様々な花を詠み込んだ連作中の一首で、どここのことを詠んだものかはわからない。「鶴の来ると伝ふる」は、過去にツルが来たと伝承されているという意味ととれなくもないが、それならば過去の助動詞を用いて「来しと伝ふる」としても良さそうで、旅の時点でこ

こにはツルが来るのだと誰かから伝え聞いた、ととる方が自然だと考える。

④佐藤佐太郎（一九〇九―一八七年）

茂吉の弟子である佐藤佐太郎は、出版社勤務の関係で、一九四六年春から夏、同年秋に札幌に滞在し、その間に道内各地を旅行する機会があった⁹⁾。そのときの作は、歌集『立房』に「札幌雑詠」十四首、「石狩川」五首、「野幌原生林」十首、「洞爺湖」九首、「昭和新山」二十首、「続札幌雑詠」十七首、「塘路湖」十九首、「摩周湖」十八首、「弟子屈村」十六首、「弟子屈山中」十三首、「石狩川口」十三首の計一三四首を収める。そのうち「塘路湖」に次の二首がある。

丹頂の鶴が朝々あるといふ山下岸にめぐりわが来し

この湖に常くる鶴は三羽づれ唯ひとつにて居るもありとふ

これらもタンチョウを実際に見ての作ではないが、その地で出会った誰かが直接見て知っていることを聞いての作か。朝の時間帯を選ぶなどの工夫をし、運に恵まれさえすればタンチョウを見ることができそうだ。

一九五五年の歌集『地表』には、同年四月に旅をした際の作、「釧路附近」四首、「阿寒」五首、「層雲峡（一）」五首、「同（二）」七首の計二十一首を収める。これは四月の旅の際の作のようだ。ツルは見当らない。

一九六三年三月に網走・釧路・根室を旅した際の作は『冬木』に「氷海（宇登呂行）」十四首、「残雪」九首、「納沙布崎」十首の計三十三首を収める。この旅の主目的は流水を見ることだったようだ。ツルは見当らない。

⑤結城哀草果（一九九三―一九七四年）

やはり茂吉の弟子だった結城哀草果は、山形県の農村に居住し、北海道には

一度だけ、晩年の一九六六年六月上旬に訪れ、道東を中心に旅をした¹⁰⁾。その際の作品一六二首を、歌集『道東紀行』として刊行している。

作品からたどると、訪問地は支笏湖・網走・能取湖・常呂・斜里・標茶・羅臼・別海・納沙布・弟子屈・阿寒湖・釧路・日高・札幌・江別などだった。そのうち「〔六月九日〕阿寒湖 釧路」中に次の二首がある。

丹頂鶴にも鬭争あり住む区域あり二羽が組みて一羽悄然とゐる

丹頂鶴二羽翼ひろげて舞ふさまのうるはしやさしあふぎあかぬかも

これらは実際にタンチョウを見ての作に違いない。前後の歌を見ると、前日八日は阿寒湖畔辺りに宿泊し、この日は宿泊地から自動車で十勝の池田・帯広・忠類・大樹・広尾・襟裳岬と移動したようだ。自動車を用いたことで、タンチョウを見に行くことが容易になったのかもしれない。

おわりに

以上、限られた面からだが、一九九〇年代から一九三〇年代を中心に、北海道におけるツルと人の関係を見てきた。この時期の出来事として重要なのは、一九二四年の野生タンチョウ「再発見」や一九三五年の「釧路丹頂鶴蕃殖地」の天然記念物指定だと思われるが、これらに関しては深く触れず、むしろ新聞記事や短歌など、これまで注目されてこなかった素材の紹介に力を注いだ。

対象とした新聞の発行地が道央・道南に偏っている点は留保が要るだろうが、断片的な記事にツルの生息状況がうかがわれるとはいえ、この時期の北海道で生きたツルの存在感はかなり希薄だという印象がある。新聞に掲載された商品の広告や、新聞の募集短歌、来道歌人たちの作品にも、北海道は特にツルとの関わりがあるという認識は感じ取れなかった。それでも、一九〇七年の百穂と一九三一年の茂吉の歌はツルに触れず、一九四六年の佐太郎と翌年の文明は伝

聞を詠み、一九六六年の哀草果は直接見て詠んだということには、タンチョウの生息数の増加やタンチョウへの注目の高まりといった変化が反映しているのかもしれない。

本稿の延長で、これより後の時期の北海道におけるツルと人の関係史に貢献できる可能性がある作業として、ここで取り上げた歌人以外の作品を探索してみること挙げておく。道内外刊行の短歌雑誌にツルはいないだろうか。

謝辞

本稿作成のための史料調査などについて、北海道立文書館・北海道立図書館・函館市中央図書館のお世話になった。記して感謝申し上げる。

本稿は当館「北海道の自然・歴史・文化」総合研究プロジェクト「北海道におけるツルの自然史と文化史」の成果である。また、科学研究助成金（基盤C）16K03066の成果を一部使用した。

註

(1) 久井貴世氏の研究成果は『北海道におけるタンチョウと人との関わりの歴史』（酪農学園大学環境システム学部生命環境学科二〇〇八年）、『タンチョウと人との関係史——近代日本における事例を中心に』（北海道大学大学院文学研究科二〇一〇年度修士論文）、『江戸時代におけるツルの生息実態および人と関わり』（同二〇一五年度博士論文）ほか。

(2) 北海道開拓記念館の「羽ばたき」の像と記念ホールのタペストリーの制作経過については、『北海道開拓記念館』（建築画報社、一九七一年）を参照。

(3) 俵浩三『北海道の自然保護（増補版）』（北海道大学図書刊行会、一九九〇年）一三四―一三九頁。

(4) 一九一二年の歌会始の題「松上鶴」がツルの生息に反することをめぐる当時の議論について前掲久井『江戸時代におけるツルの生息実態および人との関わり』第二章を参照。

(5) 以下、斎藤茂吉については、『斎藤茂吉選集』全二十巻（岩波書店、一九八一―八二年）による。

(6) 「短歌の範囲」（一九一九年）（『選集』第十六巻所収）。写生から離れた観念的な歌の制

作・発表を自らに許している点は、議論が多い茂吉の戦時詠とも共通する問題があるだろう。

(7) 百穂の北海道行きについては、山田伸一「平福百穂「アイヌ」の周辺」『北海道開拓記念館研究紀要』第四十三号、二〇一五年を参照。このときの短歌作品は、『アカネ』第一巻第一号、一九〇八年、三二―三四頁。

(8) 以下、土屋文明については『土屋文明全歌集』（石川書房、一九九二年）による。

(9) 以下、佐藤佐太郎については『佐藤佐太郎集』全八巻（岩波書店、二〇〇一―〇二年）による。

(10) 以下、結城哀草果については『結城哀草果全歌集』（中央企画社、一九七二年）による。

The Relationship of Cranes and Humans in Hokkaido from 1890 to 1930

Shin'ichi YAMADA

Presently, the tancho crane is regarded to be a symbolic bird of each of these areas; eastern Hokkaido, Kushiro city, and all Hokkaido. However, it is thought that such view of crane is not consistent through history. This study examines the view of cranes in newspaper articles and tanka poetry from the second half of the 19th century to the first half of the 20th century.

It bears consideration that this study refers to newspapers published in Sapporo, Otaru, and Hakodate, which are considerable distances from the Kushiro region, where wild tancho cranes were 'rediscovered' in 1924. While there are fragmentary reports of crane habitat conditions stemming from this time, the sense of presence of cranes living in Hokkaido was tenuous. Cranes are found in areas such as tanka poetry submitted by readers or advertisements for prod-

ucts, however, the view of cranes reflected here is a symbol of good fortune or long life, as found in China and Japan since old times, and does not demonstrate awareness of any particular relationship between the people of Hokkaido and cranes.

On the other hand, observing tanka poetry by poets of the Araragi school who visited Hokkaido finds no reference to cranes in works by Hyakusui Hirafuku (1907), nor in works by Mokichi Saito (1931). However, Sataro Sato (1946) and Bunmei Tsuchiya (1947) composed tankas about cranes through hearsay, and Aisoka Yuki (1966) composed tankas based on direct observation of cranes. It is possible that this change reflects factors such as the increase of crane habitats and heightened interest in cranes.